

とよあしはら (豊葦原) みずほの国の司馬遼太郎 (試論)

細野 哲弘 前 みずほ銀行 顧問
(元 特許庁長官 元 資源エネルギー庁長官)

司馬遼太郎のファンである。すこぶるつきのファンである。作品は(さすがに多岐膨大過ぎて、全部とは言わないが)小説から評論までかなり読んでいる。中学の時に吉川英治の「三国志」で歴史の面白さに目覚め、以後はずっと司馬である。「国民的作家」というと人によって違った思いがあるだろうが、その吉川英治から司馬遼太郎への境に青少年期を過ごした手合いには、(少なくとも歴史物については)こうした読書遍歴の人が少なくないと思う。私の歴史好きの性分はかなりを司馬に負っている。また、こんな風に時々書く文章も、およそ言及が憚られるほど拙いながらも、彼独特の文体の影響を受けていると自覚している。

彼は、1956年(昭和31年)「ペルシャの幻術師」で講談倶楽部賞、1960年(昭和35年)に「梟の城」で直木賞を取っているが、彼の出世作は何と言っても「竜馬がゆく」である。これがNHKの大河ドラマ

になったのが1968年(昭和43年)で、船の舳先で風を受け波頭を超えていく、日本人らしからぬ自由奔放で闊達な「海の男 竜馬」のイメージを定着させた。小学生の時に茶の間に初めてテレビが入った世代には、大河ドラマと云うのは大変魅力的な番組で、小学高学年のころから、毎週欠かさずに観ていた。因みに「竜馬がゆく」のほかにも、彼の作品が大河ドラマになっているものは5作品にのぼり、他の作家に比べて断然多い¹⁾。

今年、彼が亡くなってちょうど20年。今年の文芸春秋2月号に「『竜馬がゆく』がうまれるまで」という未発表原稿が載っていた。スルスルと人物像に感情移入していくさまが表れていて、それはそれで興味深いのであるが、読んでみて、従来個人的にぼんやりと抱いていた彼のある傾向に思い当たった。本稿ではそれを書いてみようと思う。

「ぼんやりと抱いた想い」と云うのは、^{ひいき} 鼯鼠の引



竜馬像(高知市提供)



竜馬記念館にて(高知市・左は姉乙女)

1) 大河ドラマは今年の「真田丸」で55作目であるが、司馬の作品からのモノは「竜馬がゆく(6作目)」のほか、「国盗り物語(11作目)」、「花神(15作目)」、「翔ぶが如く(28作目)」、「徳川慶喜(原作名「最期の将軍」(37作目))」、「功名が辻(45作目)」がある。歴史大河ドラマの脚本は、最近でこそNHKのオリジナル(例えば2010年の「龍馬伝」)が増えたが、当初は所謂大家と云われる歴史小説家の原作からのモノが多かった。船橋聖一(花の生涯)、村上元三(源義経)、大仏次郎(赤穂浪士、三姉妹)、吉川英治(太閤記、新平家物語)、海音寺潮五郎(天と地と)、山岡荘八(春の坂道)、山本周五郎(樅の木は残った)などである。なお、彼の三大小説のひとつである「坂の上の雲」は偶々大河ドラマにはなっていないが、2009年から2011年まで足掛け3年でNHKが特別仕立ての同名の連続ドラマを放映している。

き倒し、期待の裏返しなのかもしれないが、一種の「喰い足りなさ」のことである。それを論述することは、結果的に、長年親しんだ大好きな司馬遼太郎に「悪口」言っているようにも、「悪態」をついているようにもみえる剣呑な試み。私と同様な感想を持つ人が他にも居るのではないかと思う反面、相当な数のファンから叱責される公算も大である。この際、それを覚悟で作品を読んできた個人的な率直な感想を綴ってみたい。

司馬遼太郎といえば「憂国の士」という印象がある。20年前に惜しまれて亡くなるまで、「どうして日本はこんな落ちぶれた国になってしまったのか?」、「戦争の悲惨な体験と引き換えに日本国民は何を得たのか?」、「国のために倒れた人に誇れるような国の建設が出来たのか?」と悲憤慷慨するというイメージがある。まさに「この国のかたち」を求めて、地団太踏むような悲痛な心情を吐露して、最期まで日本を案じていた感がある。

彼の悲憤慷慨は、歴史に通暁した国民的作家による社会への警告・警句として広く共感を得ていたと思う。私もそれを共有していたし、今も共有していないわけではない。

しかし、大好きな作家だから、そしてある程度の数の作品を読んだからこそ、敢えて彼に問いかけた。「司馬さん、あなたの気持ちはわかる。でも、じゃあ、あなたはどんな国にしたかったんですか? なにか目指す具体像があったんですか?」と。

司馬が好んだ題材に明治のロマンがある。我が国に係る最近の歴史を見るに、国の命運を左右するような戦いに臨んで、相手のことをほとんど研究しなかったか、或いは都合の悪い情報に目を背けた事例が少なくとも二つある。

一つが太平洋戦争の時の日本。冷静客観的な分析・情報に背を向けて、気合だけで突き進んだ。もう一つが日露戦争の時のロシア。攻め込む相手の新

興日本の実情を全く研究しなかった。新興国の国民の気概、制度機構の熟度、軍の司令官・兵の能力、教育・民度などまるで調べていなかった。当時ロシアは国として難しい内情があり余裕がなかったし、日本を舐めてかかっていた。(ロシア陸軍はともかく)少なくとも、ロシア海軍はそうであった。旅順に居る東洋艦隊に合流させるべく、バルチック艦隊を欧州から長途ぐるりと回航すること以外に何かを考え、備えた形跡に乏しい。

そうではあったが、司馬は、当時の日本が「自分の分際を知り(「身の程を弁えて」とも云う)現実を直視して」、なけなしの財力と人を合理性に張って祖国防衛戦を戦い抜いたこと、初々しくも澁刺と国難対処したさまを、高く評価して「坂の上の雲」を書いた。

そして、それとの対比で、それ以降の目を背けたくなるような為体、例えば、化け物のような統帥権解釈を振り回した昭和軍部の独善的行動、戦争の目的と手段とを逆さまにしたような戦争指揮、何か変だなど思いつつズルズルと泥沼にはまり込んでいった世相・風潮を激しく非難している。彼はその時代を「異胎の時代」と云った²⁾。

「坂の上の雲」にある「自分の分際を知った上での合理主義」と云うのは、武士的リアリズムのこと。身体資本で命のやり取りをする武士にとって、戦場では「無駄死にしないこと」、「負けないこと」が大事。「名誉の戦死」などというのはあとから周りが言うことであって、生身の武士はリアリズムそのもの。日露戦争当時の当事者は自国の弱さ・限界を知りぬいていた。借金(外債)してイギリスに発注してやっと揃えた連合艦隊など一擧の装備一式しかないの

で、勝たないまでも極力負けない方式を考えた。当時の政府の布陣を見ると、首相桂太郎、海軍大臣山本権兵衛、軍令部総長伊東祐亨、陸軍大臣児玉源太郎、参謀総長山縣有朋 等となっていて、幕末

2)「異胎の時代」というのは、異様で倒錯した展開をもたらす疫病神のような病巣を孕んだ時代構造のこと。日露戦争終盤において、「日本にはこれ以上ロシアと戦争を継続する余力はない。即刻停戦講和すべし。」という冷静切実な現場の判断があった一方、政府はそれを国民に知らせなかった、或いはロシアに知られたいため実態を伏せるという政治判断を余儀なくされた。それによって国民の間に重大かつ容易に修復できない事実認識のギャップが生じた。ポーツマス条約の後の日比谷焼打ちなどが起き、東郷、乃木などの神格化(神社まで出来た)と現実軽視の精神論が蔓延(はびこ)ることを招いた。



三笠艦橋の図（東城鉦太郎画。横須賀市・戦艦三笠記念館資料より。中央が東郷平八郎司令長官、右に秋山真之作戦参謀、左に加藤友三郎参謀長、他に伊地知彦次郎艦長ら、左上はZ旗。）



東郷平八郎像と戦艦三笠
(横須賀市 三笠記念館)

の戦乱を生き延びた薩長の強兵ばかり。現実的でないはずがない。日本海海戦では東郷や秋山ばかりが有名であるが、山本権兵衛海軍大臣という御仁が、戦える海軍の「チームコーディネーター」として立派であった。彼の海軍改革³⁾や東郷平八郎抜擢もさることながら、その人事の一環で連合艦隊参謀に秋山真之を持ってきたことは祝着。登用された秋山は、ワシントンに駐在して当時絶対視されていたマハン提督の戦術にも触れたはずだし、築地の兵学校で英国のダグラス少佐の講義も受けたが、その物量巨砲主義は日本に合わないとして見向きもしなかった⁴⁾。代わりに日本古来の瀬戸水軍の兵書を読み漁って、例の「丁字戦法」、敵前一斉回頭を編み出した。兄の秋山好古はというと、騎兵の癖に、長い手で長槍

を操るコサック騎兵に敵わないと見るや、躊躇なく騎兵を馬から下ろして機関銃陣地で凌いだ。いずれも現実重視の「負けない」ための戦法である。また、同時に、さっさと緒戦の勝利で戦争を終わらせるための外交の手段も尽くした（日英同盟、米大統領への斡旋依頼など）。誠に「地に足が着いた」対応ぶりである⁵⁾。

とにかく司馬はこれらを引き合いに出して嘆くのである。まさに「あの明治の輝ける日本」はどこに行っちゃったんだろうか？……なのである。

しかし、「そうは言いますがねえ、司馬さん。あなたはそんなに合理的精神の信奉者だったんですか？ あなたは初々しさが合理性を纏うようなオボ

- 3) 山本の功績は各般に亘る。海軍大臣としての東郷の抜擢は有名だが、軍務局長時代には将官8名、佐尉官89名の更迭・若返りを始め、海軍の合理化、筋肉質化に邁進した。また、効率を旨とし、艦の燃料を英国産の高品質石炭に替えたほか、船上の食事の栄養改善(カレーライス、肉じゃが、パン食の導入など)などにも目を配った。当時乗組員の職業病であった脚気(かっけ)がパン食で克服された話は有名。のちに二度に亘り総理にもなるのだが、真相は不明なるも、現役の折の組織改革を巡り陸軍との確執を生じ、功績抜群(海軍大臣従一位大勲位功一級伯爵)であったにもかかわらず、元老への道を閉ざされたとする説がある。
- 4) 秋山が捨てたこの巨砲(巨艦)主義を、あとの昭和海軍が妄邁墨守して戦艦大和などを作ってしまったのは皮肉。また、「丁字戦法」はレイテ沖海戦で米軍が採用して、日本艦隊に致命的な打撃を与えたのというのも因果な巡り合わせ。リアリステックでないこと云うことは、過去の成功体験に囚われて精神主義に流れ、とりわけ科学技術の進歩に鈍感になることでもある。特許庁ロビーに肖像が掲げられている「日本の10大発明家」の一人・八木秀次博士が考案した電波兵器の技術を、昭和の軍部は見向きもしなかった。他方、米軍は八木アンテナに着目したレーダー技術で日本軍の動きを看破。なお、エネルギーに携わった立場からついでに言えば、1920年代以降のサハリン島(北樺太)や満州における石油開発・折衝の経緯には、軍部の科学音痴ぶり(とりわけ化学分野)と世界の技術潮流への無関心・無知によって、戦後の我が国のエネルギー政策の形にまで尾を引くような失態が数多くあり、歯ざりする思いである。
- 5) 明るく合理的なはずの「坂の上の雲」も、後半は旅順・二〇三高地の攻防での第三軍・乃木希典、伊地知幸介コンビによる不合理極まることされる作戦指揮を描いて、その後の日本の「嫌なムード」の前触れがされている。即ち、陸軍の面子にかかわるとして、折角の海軍からの艦砲取り外し提供の申し出を断ったとされ、無意味な突撃肉弾戦を繰り返した挙句、13万人のうち5万人強を戦死傷させたことと記述している。まさに万骨枯れたのに両将は後に栄達。また、高級幕僚たちの保身が悲劇を拡大したとも述べている。但し、二〇三高地、旅順攻略やその後の奉天会戦についての事実関係の理解や評価には様々なものがあり、まさに「文学の示す時代性」には注意が必要。「大山と児玉が合理的で、乃木、伊地知が不合理」と単純に色分けできるほどナイーブなものではなかったであろうし、司馬の描いた「坂の上の雲」が史実に近いと云うつもりもない。ただ、ここでは、彼においても「坂の上の雲」で明暗両方を書かざるを得なかったことだけ述べて、これ以上深入りはしない。

コさだけで日本が世界にノシテいくようなことを夢見ていたんですか？」と聞きたくなる。此れが、今回のテーマ（というか「言いがかり・難癖」?）。

以下話があちこちに及ぶので、予め話の構図をお示ししておきたい。

司馬ほどの大作家の内面を推し量ることはそう簡単にはいかないのであるが、浅学非才の身に出来ることといえば、「一定の角度から光を当ててみるとこう見える。ここに影が出来るぞ。」と云う仮説を立てること。これを「見立て」という。一種の「偏見による問題設定・ディメンジョンセッティング」である。

光の当て方を変えれば、当然「見立て」も変わる。お前の勝手な「見立て」は司馬像を損なうと云って、多くのファンからお叱りを蒙るかもしれないが、ここでは次のように「見立て」てみることにする。

ここでは三つの軸を見立てる。すなわち、①司馬の個人的な好み（嗜好）、②合理性を尊ぶ精神、それと③現実の世相（世相直し）である。

この三つを「見立てる」と、彼はこれら三つのバランスの維持に汲々としつつも、最後は「居心地の良い自分の嗜好（好み）を前面に出して、ふわふわとした世界に逃げ込んでいる」のではないかと思えるのである、私には。

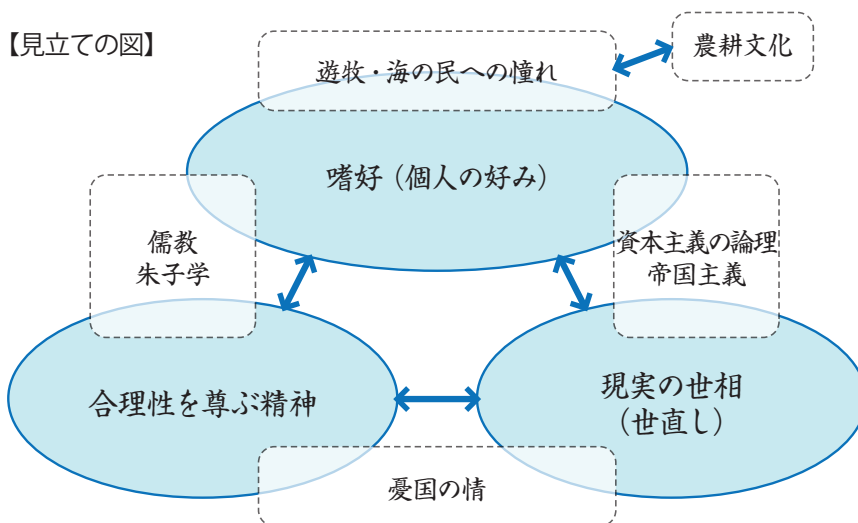
どうしてそんなふうに思えるかと云うと、

まず、彼の嗜好（好み）の話から……

彼の身悶えするような「憂国の嘆き」は、彼の「モンゴル好き」、坂本龍馬に代表される「朗らかな自由人志向」とは、どうも相いれない気がする。

つまり、彼には草原を彷徨う遊牧民、馬賊への共感が元々あって、それで外語大でモンゴル語を専攻したりするのだが、颯爽と大地を駆ける民（スキタイ・匈奴、女真、鮮卑、烏孫）の素朴さに憧れるような処がある。それは彼にとってのロマンみたいなものであって、理屈抜き的心情である。以前「騎馬民族が来た、来ない」という日本人のルーツについての学説論争⁶⁾があったが、彼は心情的には騎馬民族が日本の祖先であってほしいと思うクチであろう。

ついでに言うと、彼の作品の一つである「義経」では、義経は身を寄せた平泉で騎乗したまま戦うことを学んで、以後の平家との闘いに応用して大成功したという筋になっている。意外かもしれないが、それまで武士は馬を降りて戦っていた。藤原氏の奥州は当時隔絶した文化圏であり、ここに騎馬文化があったと、さりげなく、しかし嬉しそうに記述している。この物語は、頼朝の確立しようとする鎌倉武家秩序と「政治音痴」の義経が溺れた京都の公家秩序との時代秩序を巡るヘゲモニー相克を描いたなか



6) この歴史論争は「江上波夫・佐原真」論争ともいう。古代史学の分野ではなお議論が残っているとのことではあるが、どちらかと云うと騎馬民族説＝日本国家の征服王朝説に立つ江上説は旗色が悪いようである。

なかシベリアなものであるが、私はどうも馬の記述の方に気が行ってしまふ。

一方において、商いでモノを動かして富を増やすとか、既存のしがらみを気にせず、自らの技量や才覚を頼んで自由に動き回るスタイルも彼の嗜好(好み)である。

司馬には割に四国・瀬戸内海に纏わる作品が多い。四国も瀬戸内も島であり海である。「菜の花の沖」の冒頭は「淡路の国は古来海人の国であった」で始まる。高田屋嘉兵衛は淡路島の出身で、菜の花から大量の油を得て、黒潮に乗って広く展開して、それを商うことによって当時の封建システムを飛び越えていく。最後は難破してロシアに抑留され、苦勞して帰国するのであるが、不思議な明るさがある。「空海の風景」の空海は讃岐、「坂の上の雲」の秋山真之は伊予・松山、「夏草の賦」、「戦雲の夢」の長曾我部父子(元親、盛親)、それに龍馬は土佐。いずれも海の人である⁷⁾。もっとも、「坂の上の雲」の秋山好古は陸軍で騎兵であり、この小説には司馬の好み⁷⁾が二つながら入っている。

この「遊牧民好き、海の民好き」のいずれにも共通するのは、コツコツと狭い国土に固執してイジマシク生きることへの違和感であり、それは、偏狭な土地にしがみついた農耕文化への違和感でもある。

司馬と云うと、日本の風土に優しい目を向けているから、稲作・農耕文化にも当然に共感度合いが高いと思われがちだが、私は違うと思う。

司馬は、(その自らの名前の由来にもあるように)中国の歴史には深い造詣があったが、意外にも中国ホンチャンを舞台にした小説は「項羽と劉邦」くらい。面白くないわけではないが、中原という農耕地で誰がヘゲモニーを握るか、民を食わせる者とはどんなヤツかと云うだけの話。

彼は、寧ろ長城の外からの視線で中原のことを観ているようなところがある。「乾燥した草原から湿



高田屋嘉兵衛像
(北海道根室 金刀比羅神社)



長曾我部元親像
(高知市)

潤な農耕地の山河を観ていると……(中略)……ときに農業王朝そのものが奇習と奇行の連鎖のように思える(「歴史の夜嘶」)というのは、決して農業を基盤とする文明へのシンパシイ表現ではあるまい。

つまり、定住して農耕に勤しむ文明よりも、土地に縛られない遊牧民の素朴さ、商いの民・海の民の自由さの方に断然親しみを感じていると云うことである。

ところが、「見立て」の他の二つ、合理性の追求や現実の世相のありようは、彼にその嗜好に浸ることを許してくれないのである。

明治のある段階までの日本は、素朴な合理性とテクノロジー、さらには才覚を頼んで、どこまでも伸びてゆける予定調和の希望の国であった。つまり、圧倒的なヘゲモニーがなくて星雲状態の社会、先がどうなるか分からない揉み合いの世界では、彼の三つの軸はなんとか共存可能であった。

しかし、遊牧民、騎馬の民族の世界は平和的で長閑でいいなあ……では終わらないことは、彼にも分かっていた。それは当たり前で、草を摂取し放牧し、時には村を襲って産物などを掠め盗ってくるというのは、摂取する側がそこそこの規模にとどまり、摂取・搾取される側の許容範囲を越えなければ予定調

7) 讃岐だからと云って、空海を他と一緒に「海の人」とすることは些か乱暴かもしれない。しかし、長い間、阿波の大瀧岳や「目に入るのは空と海だけ(名前の由来でもある)」という室戸岬の御厨人窟で修業していた彼が、私費修行僧として忽然と海を越えて唐に向かったことには海との縁(よすが)を感じる。因みに、804年(延暦23年)に仕立てられた遣唐使船は26年ぶりのモノで、4隻の船のうち第3船、第4船は遭難し、空海の乗る第1船と桓武天皇派遣の官費留学僧である最澄の乗る第2船とだけが唐に辿り着いた。のちの真言宗、天台宗の開祖が同じ派遣使節団に居たことや、第1船にはのちに「三筆」に数えられる空海と橘逸勢とが乗り合わせていたという事実も面白い。なお、空海は幼名を真魚(まお)と云った。

ところで、四国のうち阿波徳島の物語がないが、小説ではないものの「街道をゆく32巻」は「阿波紀行、紀ノ川をゆく」である。



古代アジアの図（「世界史ヒストリア」(山川出版社)より）

和的に大きな問題はなく、勝手にロマンと云っていれば済む。しかし、遊牧民、馬賊グループの図体が大きくなると大略奪になるわけで、13世紀のモンゴル帝国（及びその汗国）のロシア農耕民族に対する収奪の歴史（「タタールの軛^{くびき}」）を見れば、それは歴然。

また、いくら農耕を好かないと云っても、闊達で自由なはずの商業資本（商品経済）も、資本主義の発展過程の中で集積が進み、寡占・独占をもたらして、結果的に人々の自由を束縛し、格差を生むことになる過程は見えていたはず。

また、合理性と世相との関係も微妙である。

もともと彼の思想には、西洋哲学的な素養があまり感じられない。合理性の解釈・立てつけも、彼独特の言葉遣いでなされている。彼ならではの表現とは思ふものの、「思想とは……（略）……要するに飼い馴らしのシステムのことである。」とか「わが国には思想の代わりに世間があった。」（「歴史の風音」）などという物言いには、ちょっとギョッとするし、その立てつけには多分に東洋的な色合いを感じる。

だから、仮に合理性と実際の世相との間に矛盾があれば、例えば宋学、なかんずく自己修養を重んじる儒教・朱子学の教えなどに格別の思いを寄せるところがあったかもしれない。つまり、これらが日本的な風土になじむ合理的な社会の実現・構築に当たって、うまいバランスになるのではないかと。

朱子学というのは、もともと格物致知^{かくぶつちし}を旨として人格形成する実践道徳である。しかしながら、その元来の考え方はともかく、広く為政者に採用され、共同体倫理として道徳実践に使われてしまうと（現にそう使われたが）、いとも簡単に体制側からの秩序維持装置に墮落してしまった。また、その大義名分イデオロギーたるや、幕末の水戸藩が典型であるのだが、正邪を極端に思想展開した⁸⁾。事実・現実によるよりも観念の尺度だけで、どこまでも有無を言わさぬ二者選択判断を強いていった。そして、その先に「統帥権⁹⁾」という鬼っ子を生んだり、「普通のマトモな人がとんでもないことをしでかす」ような雰囲気醸し出したことも見えていたはずである、彼には。

8) 宋学は多分我が国に初めてまとまった形で入って来たイデオロギーだったと、司馬は述べている。絶対の観念でもって、地上の全てのモノを正邪（善悪）に峻別するという思想体系である。幕末の水戸藩の朱子学の大義名分論と云うのは、正邪をとことん妥協を許さずに突き詰める。やっていくうちに正の幅がどんどん狭くなり、遂に針の先端くらいの面積しか残らない。あとはみんな邪という整理になる。まさにカミソリの刃のように正邪を研いでいき、拳句、論敵だけではなく自分・味方をも自傷自滅させる弊がある。現に天狗党の乱などを経て水戸藩士は内紛自滅してしまった。有為な人が軒並み失われてしまった。だから、「尊王史観」で明治維新の蔭の推進勢力だったにもかかわらず、新政府に水戸藩の出身者は意外なほど少ない。

9) 「統帥権」問題を一概に論ずるのは実態的、歴史的に難しい点があるが、元々は戦場での「帷幄上奏権（いあくじょうそうけん）」なるものがあり、これを平時に拡大解釈適応をして、軍部が国会、行政の判断の外で（天皇の名において）軍事を中心とした内外政を専断したとされている。即ち、「帷幄上奏権」とは、戦場指揮に臨んで、天皇の統帥権を輔弼する軍（陸軍）の参謀本部（の長）が、例外的に直接に天皇に対して方針、作戦を上奏できるとしたもので、本来的に平時や国政一般には適用されるものではなかった。しかし、天皇と云う権力の正統性を大義名分論的なイデオロギーで裁断して行って、その先にかかる軍部独断の道を拓いてしまった。

そしてなにより、司馬は、こともあろうに騎馬・遊牧民のふるさとして満州で、伸びやかさと朗らかに満ちた『明治』という国家の末裔が、無定見にも侵略と云う愚拳に手を染めるのを観てしまった。

そして、自らもペラペラの装備の戦車をあてがわれてロシアのGT戦車に対峙させられそうになった戦車小隊長として、何の戦略もなく、情けもなく、国民を見捨てていく関東軍や大本営参謀の無責任さを実感してしまった。

司馬は明治のある時期までの物語をせっせと書いたのに、そのあとをなぜ書かなかったのか？ 特に、ノモンハンについては随分取材もし、準備した形跡があるのについに書かなかった(書けなかった)のは、それを観てしまったからではないか？¹⁰⁾

また、自由な貿易、商業活動による伸びやかな世界のはずが、資本がその内包する合理性を發揮すればするほど、徐々に非人間的な側面が出てくる。つまり、経済活動の合理性は資本主義的展開の中では牧歌的でない沢山の問題を生むわけで、彼が密かに期待したかもしれない(日本的な)中庸とか節度という枠を軽々と越えて自己展開してしまう。そして、場合により悲惨な侵略・帝国主義的行動にも結びつくことがある。論語に「己の欲する所に従えども、矩^{のり}を超えず」とあるが、この矩(公共の社会規範)と資本の論理とは相性が良くないのである。

でも、彼はそれを認めたくなかったのではないか？

仮に、それをそうだと認めてしまうと、彼の憂国の嘆き、予定調和の合理性を期待する悲嘆は、捌け口・行き場所を失ってしまう。

つまり、合理性の追求の先に世相の解決策が見えず、また好みの世界も一皮むくとその先に安楽はな

いと分かってしまい、仕方なく、「好みの世界」を半生^{はんなま}の状態にして、その中で憩うことで気持ちを落ち着かせるしかなかったのではないか。

一時期、彼は日本の土地政策の欠如、特に土地ころがしを激しく非難していたことがある。「諸悪の根源は土地の所有にあり」と断言して、「土地への固執・しがみつきさえやめれば日本の国、経済はモラルの高い筋肉質のモノになる」とばかりに、執拗に土地の公有化を主張した(「土地と日本人」¹¹⁾)。でも、これは、彼の内面の矛盾を土地問題(土地私有問題)に象徴的に押し込めて、行き場のないストレスを発散しているだけのように見える。

そういえば、司馬は根っからの関西人ではあるが、必ずしも王朝文化や難波・大坂の趣きに共鳴する度合いが大きかったわけではなく、例えば東国の権力・武家政権にも「国の成り立ち」と云う観点から彼特有の評価をしている。そして徳川治世下の武家社会のある構造には妙に好意的な目を向けている。これも土地絡みである。つまり、「国(藩)を治める殿さまには年貢の徴収権はあっても、土地の所有権はなかった。土地を持つなんて下賤なことをしなかった。(城にだって、屋敷にだって所有権はなく、国替えともなれば、あたかも公共物のように簡単に明け渡した。)明治の廃藩置県が一夜にして成った秘密はここにある」というような話を、アチコチで嬉しそうに紹介している。しかし、これは「逃げ」であって、まやかしてもあるが、彼の三つの見立ての世界ではそうするしかない云う彼なりの処世術であったろう。

彼の好みについて、少し言葉を足したい。

前述のように、彼は安定を旨として狭い地べたと相談しながら慎重に無理なく生きていくよりも、世

10) ノモンハンあたりからは(その前の上海事変、満州事変なども含めて)、基本的には、現場での状況判断の稚拙さ、戦略欠如の余りのバカバカしさに、司馬は筆を起す気になれなかったのだろう。もともと彼は歴史を単に史実を忠実になぞると云うより、「列伝」風に人物中心の展開をする作風であり、「人惚れして」感情移入できる主人公の有無は極めて大きい。その点、流石に辻政信や服部征四郎では、清々しさがなご過ぎて彼の物語の主人公を張れないであろう。ノモンハンについては、司馬は、無責任が横溢する幕僚の中であって断然異彩を放った一人の「気骨ある」佐官に着目して彼を主人公にした小説化を準備したが、彼との取材途上の不幸なミスコミュニケーションにより、企ては成就しなかったとされている。

11) この対談集には松下幸之助氏との対談も載っている。松下氏が「土地を公有にしたら、却って『お上』がシャシャリ出てきて、色々面倒なことになるし、お上が常に正しい判断をするとは限らない。私有の方が自然。」と云う趣旨の反論するのに対し、司馬はシッコイくらいに自説に拘っている。生産要素の一つとしての土地に価格(レント)が付くのは自然であるので、あとは程度の問題(公共の福祉との調整)かもしれないが、司馬のこの拘りようをみるに、彼にとって「土地」は極めつけの琴線のようなのである。「時代の風音」という対談集に「(世の中が騒がしくとも)パチカン、パレスティナの放送が冷静なのは、これらの国が領土を持たないからだ」という発言が載っているが、此れも同じ発想か。

の大きな胎動（ダイナミズム）に乗って、華々しく既成の秩序を引っ掻きまわすと云う生きざまを愛した。それは農業主義よりも商業主義への志向でもある。だから、治水、農業土木などというものより、港町での人とモノの出入り、海の向こうとの折衝などが好きである。信玄堤の武田信玄や関東平野を拓いた家康みたいに「地べたを工夫する」人なんかより、対外貿易・流通に目を向けた清盛、義満、信長、秀吉たちの方がずっと好きはずである¹²⁾。

また、彼の作品を読むと、志半ばで倒れる人物が好んで描かれている気がする。「翔ぶが如く」の西



西郷隆盛像
(鹿児島市城山公園 鹿児島県HPより)



河井継之助文学碑(長岡市提供)

郷隆盛などはその典型で、スケールの大きい大人物で倒幕の立役者として持ち上げる一方において、倒幕の後の国家の青写真を全く持ち合わせなかったと論じ倒している。でも、彼にとって、それで西郷はよいのである。ひとつの目標に向かって突き進み、次の結末、次の時代を観ないまま非業の最期を遂げるといのが好きなのである。龍馬しかり、松波庄九郎(斎藤道三)〔「国盗り物語」〕しかり、真田幸村〔「城塞」〕、吉田松陰、高杉晋作〔「世に棲む日々」〕も、河井継之助〔「峠」¹³⁾〕もしかり。とにかく非業の死が好き。

最後まで生き残って功成り名を遂げるのは好かんのである。桂小五郎(木戸孝允)、山縣有朋、岩倉具視などは彼の主人公にはなれないのである。(ぎりぎり大久保利通はセーフか、最期暗殺されたけれど伊藤博文は総理、朝鮮総督だからアウトか)



斎藤道三菩提寺
(岐阜市 常在寺)



真田幸村像
(上田駅前)



吉田松陰像
(萩市 松下村塾)



高杉晋作像
(萩市 晋作公園)

12) 彼はどこかの講演で、「日本の政権は米(農業)基盤の政権と金(貿易)基盤の政権とが交互にできている」という趣旨のことを喋っていると記憶。さしずめ、平氏は貿易政権、源氏は農業政権、室町幕府は(少々怪しいが)貿易政権、戦国を飛ばして織豊政権は貿易政権、徳川政権は農業政権といった感じか。視点が少し異なるが、門井慶喜の「家康、江戸を建てる」は徳川の土木政権たる姿を描いた最近の好著。

13) 小千谷市に近い長岡市の妙見堰(みょうけんぜき)に河井継之助を顕彰する石碑がある。その石碑に、司馬が地元の依頼に応じて寄せた「『峠』のこと」と題する次の一節が刻まれている。「(冒頭略)……(河井)継之助は独自の近代化の発想と実行者という点できわどいほどに先覚的であった。……(中略)……武士の世の終焉にあたって、長岡藩ほどその最後を表現しきった集団はない。運命の負を甘受し、そのことによって歴史に語り続ける道を選んだ。……(中略)……書き終えたとき、悲しみがなお昇華せず、虚空に小さな金属音になって鳴るのを聞いた。」

要すれば、彼は、その先のビジョン(行く末)をはっきりさせず、或いは見ないまま彷徨うことでギリギリの精神の安らぎを保っていたように私には見える。

彼の評論などを読んでみると、問題の切り口や突っ込みの手法に卓抜したものがあり、読み進むにつれ、さてどんな方向性が示されるか先が楽しみだという構えがたくさんある。ところが、途中「余談なるも……」と云って脱線するのはそれはそれで楽しいのだが、何故か余談から本論に戻る頃に、どこかでスッと論旨がはじけてしまって、情緒的な終わり方をするような展開がままある。

もっとも、歴史評論、歴史物は決して過去を過去として描写しているのではなく、過去の事件や人物の口を借りて今現在を論じているわけだから、現在の事象が難しくなればなるほど、それは仕方がないことかもしれないのだが……。

もともと彼の小説は「敢えて事の本質をダイレクトに言わないで周りの話を紡ぎながら同心円でぐるぐる回る」ような筆致が特徴である。「あとは察してくれ」と云われているのかもしれないが、察しの悪い身にはどうも「歯痒い」感じが残る。

司馬の気持ちは、やはり自由で闊達な騎馬遊牧民、舟に乗った貿易の民とともにあった。残念ながら、彼の心は、みずほの国の農耕(稲作・みずほ栽培)には向いていなかった。

しかし、こよなく愛した遊牧民や龍馬のような海の民の自由さの行きつく先に、厳しい世界、本当は見たくない世界があると感じ取ってしまった彼は、土地問題などに片寄せて鬱憤を晴らしつつ、フッと視線を泳がせて「宙ぶらりんの流離いの世界」に逃避してしまう。もっとも、遊牧民や商いの民の生活の方がよほど「イチかバチか」の要素が強くて、むしろ現代社会の矛盾の芽はそちらに根差している部分が多いのだが、彼はそこには目を瞑って遠い視線で彷徨うことを好んだように見える。

「韃靼疾風録」(1984-87年)のあと彼は小説から離れるのであるが、彼が亡くなるまで続いた「この国

のかたち」のシリーズでは、随筆という形で小説には書けなかった倒錯した昭和の事象にも、エッジのきいた切り口を入れている。また、同じく「街道をゆく」では、「此処彼処の地には、こんなに麗しい文化やしきたりが息づいていて見事な調和をなしているのに、それが国全体に生かされるようにならないなあ……」と、少し目を伏せて自問自答するように各地を彷徨っている。別の言葉で云うと、彼は一生懸命に日本・日本人の佳いところを選び分けるように探し続け、此処彼処に奇跡のように残る麗しい佇まいに心潤ませると同時に、その麗しさが危うい構造の上にあると云うことにも気づいて、嘆息するように街道を巡っている。22歳で終戦を迎えた彼は、「なんでこんなバカな国になったのだろう。でも昔の日本は違ったように思う。」と云って、そのあと判かってきたことを「22歳の自分へ手紙を書くように」書き記し続けた。彼が街道を巡りながら求めた「この国のかたち」とは、「この国の人々」と「自分自身」の心にストンと落ち着く懐かしくも床しい佇まいのことであったように思う。

彼には求道者・修行僧が果てしなく彷徨い漂うイメージがある。「街道をゆく(全43巻)」の最後は、我が故郷(美濃)にも筆が及ぶはずだった「濃尾参州記」であり、此れも未完のままである¹⁴⁾。

さて、ここまで書き進めてきて私は思うのである。果たして上手く彼に「悪態」をつけたでありますや?

司馬の合理性判断を含む思想背景は壮大である。小説家と云うよりも、思想家である。西洋哲学的な概念用語は用いずに、朱子学論はもちろん、神道論、仏教論、密教論(「空海の風景」)、真宗論から武士道論に至るまで、我が国古来の思想体系の多くをカバーした論述をしている。本来こうした深さのある彼の背景をキチンと踏まえないと「悪態」なんかついてはいけないのであるが、そんな構えをとることは浅学非才の身にはあまりに重すぎる。しかも、ここでの一知半解の「見立て」の構造を変えてしまいかねないので、敢えてそれらには触れずに「フッと視線を泳がせて」稿を終えたい。

14)「濃尾参州記」の参州とは、美濃、尾張、三河のこと。桶狭間での信長、義元や三方が原の戦いで家康、信玄などを書いて、愈々美濃路へと云うところで、司馬は病に倒れた。折角表紙カバーに雪化粧の岐阜城を載せた文庫(朝日文庫)なのに美濃の話がなくて、他の巻に比べて格段に薄い本の末尾に「未完」とあるのが悲しい。